



スローガン
「幸せ
あふれる
北小」
～私も幸せみんなも幸せ～

はぴねす

子供たちが創る「クロムブックの正しい使い方」

先日、運営委員会が行った学校生活アンケートにて、クロムブックの使い方を不安視する声が上がりました。「学習に関係のないアプリでの遊び」や「目的外のタイピングゲーム」など、便利な道具だからこそ生じてしまう課題です。

これを受け、第3回代表委員会では「自分たちの力でどう解決するか」を真剣に話し合い、次の2つのことを決定しました。

- ① 「振り返り」の徹底
利用履歴を確認し、正しく使っていない場合は、一定期間の使用制限や、振り返り・反省文を書く。
- ② 「啓発集会」の開催
全校児童で使い方のルールを再確認する機会をつくる。

1月28日（水）に、その一環として「ルールを守って、正しく使おう！クロムブック」をテーマにした全校集会が開かれました。

運営委員による寸劇では、クロムブックの便利さの裏に潜む「依存」や「マナー違反」の危険性が分かりやすく演じられました。

ただ禁止されるのではなく、自分たちで「よい学校生活のためにどうあるべきか」を考え、実行に移す。子供たちの主体性が光った、非常に心強い集会となりました。

ご家庭でもぜひ、この機会にデジタル端末との付き合い方について、お子様と話題にしたいだければ幸いです。

※集会に用いたスライドは、こちらからご覧いただけます。



幸せあふれる集会

2月4日（水）、子供たちが心待ちにしていた「自慢大会」が開催されました。「これこそ自分の自慢！」と手を挙げ、オーディションを突破した総勢18組26名が出演。アカペラの歌唱やダンス、ピアノ演奏など、会場は大盛り上がりとなりました。

中には、かつてのテレビ番組「学校へ行こう！」の「未成年の主張」のように、大声自慢に乗せて自分の思いを堂々と叫ぶ子や、伝統的なけん玉・独楽（こま）回しを披露する子もおり、会場は大きな拍手と温かい雰囲気になりました。



人前で自分自身を表現する機会は、子供たちにとって非常に貴重なものです。発表する側にとっても、大きな自信や満足感、そして「自己肯定感」を育む一歩となり、周囲にとってもその子の新たな一面を知る素晴らしい機会となります。また、観ている側も「次は自分もやってみよう！」という前向きな刺激を受けたことでしょう。子供たちの可能性と勇気に心動かされる、素敵な集会となりました。

※集会の様子（動画）は、ホームページでご覧いただけます。

もうすぐ1年生！入学説明会を行いました

立春を前にした2月2日（月）、新1年生の保護者説明会を行いました。準備するものや登校班のことなど、盛りだくさんの内容でしたが、最後まで熱心にお聞きいただきありがとうございました。

中でも印象的だったのは、CS会長山脇さんによる「家庭教育」のお話です。子育てのヒントが詰まったその言葉は、保護者の皆様だけでなく、私たち教員の背筋も伸びるような、温かくも力強いものでした。

春、ランドセルを背負った皆さんの笑顔に出会える日を、学校中が楽しみに待っています。



つづき

正月恒例の「仮装大賞」を観ていた時のことだ。元気に司会を務める萩本欽一さんの姿を見て、ふと思い出したことがある。私の子供時代はまさに「欽ちゃん」の全盛期であった。「欽ドン！」や「欽どこ」を毎週欠かさず観ていたものだ。その中で「良い子、悪い子、普通の子」というトリオ（ハイスクリルラバイ）が大ヒット）が人気を博したが、今ではコンプライアンス的に難しい設定かもしれない。当時は社会全体で、ある種の固定化された「〇〇な子」というイメージが作り上げられていたのだろう。

では、変化の激しい現代における「良い子」とは、一体どのような姿を指すのだろうか。かつては「大人の言うことをよく聞く子」がその代表だったかもしれない。もちろん規律を守ることは大切だが、これからの社会を生きていく子供たちにとって、真の意味での「良い子」とは、「自分を大切に、相手のことを想像できる子」ではないかと私は考えている。具体的には、次の三つの姿である。

- ① 「心のスイッチ」を自分で入れられる子
言われたからやるのではなく、「やってみよう」「なぜだろう」と、自らの好奇心や意欲を原動力にして動く姿である。
- ② 「ごめんね」と「助けて」が言える子
完璧な子が良い子ではない。失敗を素直に認める勇気、そして困った時に「手伝って」とSOSを出せる力こそが、自立への第一歩となる。
- ③ 「違い」を面白がる子
自分と異なる意見や背景をもつ友だちを排除せず、「そんな考え方もあるのか」と認め合える想像力豊かな優しさである。

「良い子」とは、決して大人が管理しやすい子のことではない。自らの足で一歩を踏み出そうとする子のことだ。ご家庭でも、目に見える成果だけでなく、こうした「心のあり方」が見えた瞬間に「素敵だな」と声をかけていたいただきたい。学校と家庭が手を取り合い、一人一人の個性が輝く「良い子」たちを、温かく見守っていきたいと思っている。

特別支援教育だより

めばえ

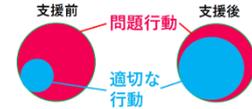
～特別支援教育が特別ではなくなる日を目指して～

時津町立小中学校
指導教諭 若杉 聡
第7号

ポジティブ行動支援

先日参加した研修会の中で、「ポジティブ行動支援」について話がありました。この内容は教員に向けての話でしたが、子どもへの支援者の一人である保護者の方々にも参考になるのではと思い、今回紹介させていただきます。

問題行動を減らすアプローチではなく
ポジティブな行動を増やすアプローチ



まず「ポジティブ行動支援」とは、行動上の問題を予防・減らす支援モデルのことで、子どもの生活の質（行動）の向上を目指すものです。簡単に言うと、廊下を走る子に「走りません！」と注意しなくともいいように（注意することを否定するわけではありません）、「廊下は歩きます。なぜなら～」と話をしたり、「**は**しらず**さ**わがず**み**ぎがわを歩きます」などの掲示物を貼ったりし、一定期間後に評価し、結果は子どもにもフィードバックすることだと考えます。家庭で例えるならば、宿題をしない子どもに「宿題しなさい！」と声をかけるだけでなく、「帰ってからのスケジュール表」を作成し貼っておき、週末などに振り返り、できていれば称賛の声掛けを、そうでなければ作戦をたて直すところでしょうか。

次に「ポジティブ行動支援」を進めるにあたってのポイントですが、①ポジティブな行動目標を具体的に設定する、②ポジティブな方法で促す、③**応用行動分析学**の理論に基づいたものにしていくことです。①については、抽象的な表現（おりこうにします、勉強をがんばります）は避け、**具体的な行動で記述**（〇時までには寝る、音読・算プリ・漢字練習をしてからゲームなど）をしましょうとのこと。②については、**望ましい行動に着目**し（ペアレントトレーニングの考え方）、称賛などポジティブな方法で促していきましょうとのこと。③について簡単に言うと、「がんばったらいいこと、がんばらないといいことなしもしくは悪いこと」となるようにしましょうとのこと。具体例を挙げると、お店でお菓子を買ってと泣き叫ぶ子にお菓子を買ってあげるのではなく、**がんばった時にこそお菓子を買ってあげましょう**ということ。



③の応用行動分析学についてもう少し詳しく話すと、ある問題行動（登校を渋る、癇癢をおこすなど）がどうして多いのか（育て方？学校の関わり方？本人の特性のせい？）と考えるのではなく、「どのような環境で」「（支援者が）どのような行動をとると」「（子どもに）どのような変化が生じたか」を考えていきます。

登校を渋るケースで具体的に考えると…

- 「どのような環境で」→家庭内か外出の際か前日からか登校直前かを見極め、
- 「（支援者が）どのような行動をとると」→「行きたくないね。わかるよ。」などの同調か、「じゃあ今日は休んで明日は行くとよ。」などの受け入れか、渋る言動はスルーし「宿題は終わらせているね。」「月金バックは用意してるね。」などの**望ましい言動に着目**しているか自己分析し、
- 「（子どもに）どのような変化が生じたか」→各関わり方・声掛けの後にどう変わったか考えるものです。

最後に、「ポジティブ行動支援」は学校全体で進めていくと効果的であるとのこと。こちら各家庭にあてはまると、複数支援者がいる場合でも、**同じ目標や支援方法**をとっていく必要があると言えそうです。前号までに紹介したペアレントトレーニングと重なる内容でもあると思います。望ましい行動を増やし、見つけ、プラスの声掛けをたくさんしていきたいですね。